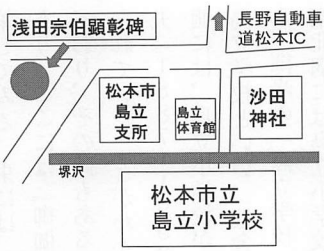
浅田宗伯彰徳碑を訪ねて

渡辺産婦人科　渡辺浩二

平成27年11月10日火曜日、昭和16年に建てられた、浅田宗伯彰徳碑を浅田宗伯（1815～1894）の生まれ故郷、松本市島立（旧栗林村）まで訪ねた。当日はあいにくの曇り空、途中雨も降っていたが、昼ごろに松本市役所島立支所に到着。このころには雲間から日がさし、なんとか傘もささずに彰徳碑を見ることができた（写真1）。

写真1

まず、場所の紹介からしておこう（地図）。長野自動車道松本インターを降りて南に5分ほどで到着するところに長野県松本市の島立支所がある。この西側の松林の中にひっそりと浅田宗伯の彰徳碑が建っていた（写真2）。碑文の横には看板があり、そこには「浅田宗伯先生の碑（漢方儒医の権威）文化12年（1815）五月当北栗林村に生れ、長じて京都で医術を学び儒学を頼山陽に学ぶ。のちに江戸に出て漢方医を開業、たちまち名声を得た。安政5年（1858）徳川将軍家の侍医となる。明治12年（1879）宮内省侍医を拝命する等、漢方医の権威者であると共に、儒者とし国事にも奔走した。明治27年（1894）3月16日没、行年80歳。浅田飴の創始者として知られている」と紹介されている。



地　図

浅田飴の創始者として知ら

写真２

策してみる。東には、延喜式にも載る古社、沙田神社があり、ここには『御伽草子』ものぐさ太郎の墓が伝えられており、その碑もある。この地が古くからの人里として知られていたことがわかる。また沙田神社境内には折口信夫（１８８７～１９５３）の歌碑もあった。島立支所の南側には、島立小学校がある。明治18年の創立という。もと島立学校といい、校舎入口には勝海舟（１８２３～１８９９）揮毫の「島立学校」の碑があった。この小学校校庭の東北隅には島立小学校校歌の作者である窪田空穂（１８７７～１９６７）の歌碑が建てられており、「湧きいづる　泉の水の盛り上がり　くづるとすれや　なほ盛り上がる」と詠まれる。この辺りには古くから泉の湧き出る場所が数多くあったらしい。明治10年生まれの空穂が、幼いころ、開智学校、そして長野県尋常中学校（現長野県松本深志高等学校）に通っていたころのことを詠んだ歌だそうだ。泉がこんこんとわく姿に、浅田宗伯が生きていたころの風情を知ることのできる歌である。ここには、明治大正の薫りが色濃く残る。島立小学校から島立支所にもどる途中、その境に川があった。堺沢というらしく、梓川の分流である。立て看板によれば、中世にはこの堺沢の北側が島立郷、南は浅田宗伯の生まれた栗林郷とされ、その堺川だという。すると、彰徳碑は島立郷よりに建つのであろうか。

晴れ間も出てきたため、島立支所を中心として近くを散

れていると書かれており、郷里でも浅田宗伯の名前だけでは広まりにくく、有名な浅田飴の名前を持ち出したのだろう。とこの時私は思っていた。

話を彰徳碑に戻そう。彰徳碑の建立は昭和16年である。どのような経緯で顕彰することとなったのか。昭和16年6月発行『漢方と漢薬』誌第8巻6号の記事をみてみよう。

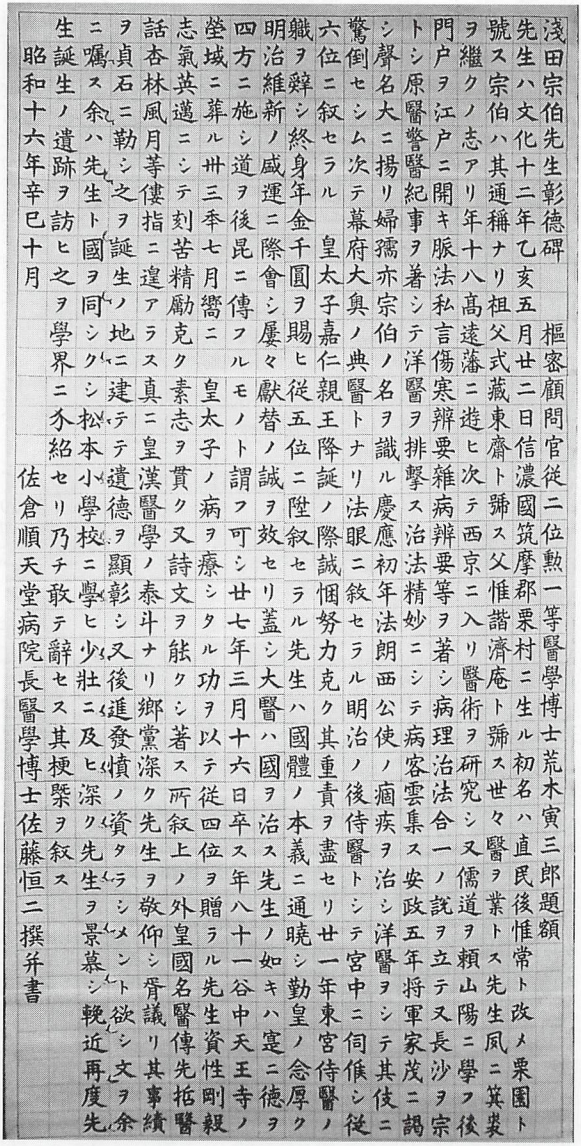
「浅田宗伯先生顕彰遺徳会　今回我国漢方医界の偉傑浅田宗伯先生の遺徳顕彰会が発起されました。浅田宗伯先生に就いては今更ここで蝶々するまでも無い事で先生の我が漢方医学に残された足跡は実に偉大なものでありました。先生は明治維新前後の時運に会し、よく医家としての初志を貫き治療の神たるのみならず、医は仁術なりとの言を実践躬行し、識見高邁、国体の本義に徹し、勤皇思想の敦厚なるまことに一世の偉傑として我らの敬仰する所であります。

この医聖浅田宗伯先生の高風を慕い、その遺徳功業を顕彰せんが為に今回、先生出生の地の長野県筑摩郡島立村村長百瀬利藤治氏代表者となり、文部大臣橋田邦彦氏、東大名誉教授長与又郎氏、同近藤繁次氏、その他朝野の名士多数賛助員、信州日々新聞社後援により浅田宗伯先生遺徳顕彰会が発起されました。この顕彰会は広く一般の寄付金を得て左の如き事業を興す事となり日本漢方医学会会員の方々からも是非右の主旨に御賛同賜りまして応分の御寄付を賜りたく御願い申し上げる次第であります」と浅田宗伯先生遺徳顕彰会発起の経緯と寄付について記載される。また顕彰会の事業として、①浅田宗伯先生頌徳碑建立②浅田宗伯先生略伝の出版③遺品遺墨展覧会の開催④記念講演会の開催⑤浅田宗伯先生全集の出版の五項目が掲げられた。御寄付申込所として長野県東筑摩郡島立村役場内に浅田宗伯先生遺徳顕彰会、東京市京橋区槇町二ノ五不二ビルの日本漢方医学会がその任を負った。

浅田宗伯彰徳碑の内容を見てみよう。題字を元京都帝国大学総長、学習院長の荒木寅三郎（1866～1942）が亡くなる前年に書いている。また選文は元佐倉順天堂院長の佐藤恒二で昭和16年6月に揮毫している。この佐藤恒二の原文が手元にある（写真3）。原文を参考にして、碑文の内容を次に記す（片仮名は平仮名に直した）。

「浅田宗伯先生彰徳碑　　枢密顧問官従二位勲一等医学博士荒木寅三郎題額

先生は文化十二年乙亥五月廿二日信濃国筑摩郡栗林に生る初名は直民後惟常と改め栗園と号す宗伯は其通称なり祖父式蔵東斎と号す父惟諧済庵と号す世々医を業とす先生夙に箕裘を継ぐの志あり年十八高遠藩に遊び次で西京に入り医術を研究し又儒道を頼山陽に学ぶ後門戸を江戸に開き脈法私言傷寒弁要雑病弁要等を著し病理活法合一の説を立て又張沙を宗とし原医警医記事を著して洋医を排撃す治法精妙にして病客雲集す安政五年将軍家茂に謁し声名大に揚り婦孺亦宗伯の名を識る慶応初年法朗西公



淺田宗伯先生彰德碑

樞密顧問官從二位勲一等醫學博士荒木寅三郎題額

先生ハ文化十二年乙亥五月廿二日信濃國筑摩郡栗村ニ生ル初名ハ直民後惟常ト改メ栗園ト號ス宗伯ハ其通稱ナリ祖父式藏東齋ト號ス父惟諧濟庵ト號ス世々醫ヲ業トス先生夙ニ箕裘ヲ繼クノ志アリ年十八高遠藩ニ遊ヒ次テ西京ニ入リ醫術ヲ研究シ又儒道ヲ賴山陽ニ學フ後門戸ヲ江戸ニ開キ脈法私言傷寒辨要雜病辨要等ヲ著シ病理治法合一ノ說ヲ立テ又長沙ヲ宗トシ原醫警醫紀事ヲ著シテ洋醫ヲ排擊ス治法精妙ニシテ病客雲集ス安政五年將軍家茂ニ謁シ聲名大ニ揚リ婦孺亦宗伯ノ名ヲ識ル慶應初年法朗西公使ノ痼疾ヲ治シ洋醫ヲシテ其伎ニ驚倒セシム次テ幕府大奥ノ典醫トナリ法眼ニ敘セラル明治ノ後侍醫トシテ宮中ニ伺候シ從六位ニ敘セラル　皇太子嘉仁親王降誕ノ際誠悃努力克ク其重責ヲ盡セリ廿一年東宮侍醫ノ職ヲ辭シ終身年金千圓ヲ賜ヒ從五位ニ陞敘セラル先生ハ國體ノ本義ニ通曉シ勤皇ノ念厚ク明治維新ノ盛運ニ際會シ屢々獻替ノ誠ヲ效セリ蓋シ大醫ハ國ヲ治ス先生ノ如キハ寔ニ德ヲ四方ニ施シ道ヲ後昆ニ傳フルモノト謂フ可シ廿七年三月十六日卒ス年八十一谷中天王寺ノ塋域ニ葬ル卅三年七月嚮ニ　皇太子ノ病ヲ療シタル功ヲ以テ從四位ヲ贈ラル先生資性剛毅志氣英邁ニシテ刻苦精勵克ク素志ヲ貫ク又詩文ヲ能クシ著ス所叙上ノ外皇國名醫傳先哲醫話杏林風月等僂指ニ遑アラス真ニ皇漢醫學ノ泰斗ナリ鄉黨深ク先生ヲ敬仰シ胥議リ其事績ヲ貞石ニ勒シ之ヲ誕生ノ地ニ建テテ遺德ヲ顯彰シ又後進發憤ノ資タラシメント欲シ文ヲ余ニ囑ス余ハ先生ト國ヲ同シクシ松本小學校ニ學ヒ少壯ニ及ヒ深ク先生ヲ景慕シ輓近再度先生誕生ノ遺跡ヲ訪ヒ之ヲ學界ニ紹セリ乃チ敢テ辭セス其梗槩ヲ叙ス

昭和十六年辛巳十月

佐倉順天堂病院長醫學博士佐藤恒二撰并書

写真3

使の痼疾を治し洋医をして其伎に驚倒せしむ次で幕府大奥の典医となり法眼に叙せらる明治の後侍医として宮中に伺候し従六位に叙せらる　皇太子嘉仁親王降誕の際誠悃努力克く其重責を尽せり廿一年東宮侍医の職を辞し終身年金千円を賜い従五位に陞叙せらる先生は国体の本義に通暁し勤皇の念厚く明治維新の盛運に際会し屢々献替の誠を效せり蓋し大医は国を治す先生の如きは寔に徳を四方に施し道を後昆に伝うるものと謂う可し廿七年三月十六日卒す年八十一谷中天王寺の塋域に葬る卅三年七月嚮に　皇太子の病を療したる功を以て従四位を贈らる先生資性剛毅志気英邁にして刻苦精励克く素志を貫く又詩文を能くし著す所叙上の外皇国名医伝先哲医話杏林風月等僂指に遑あらず真に皇漢医学の泰斗なり郷党深く先生を敬仰し胥議り其事績を貞名に勒し之を誕生の地に建て

て遺徳を顕彰し又後進発憤の資たらしめんと欲し文を余に嘱す余は先生と国を同じくし松本小学校に学び少壮に及び深く先生を敬慕し輓近再度先生誕生の遺跡を訪い之を学界に介招せり乃ち敢て辞せず其梗概を叙す

昭和十六年辛巳十月　　佐倉順天堂病院長医学博士佐藤恒二撰並書」

以上が全文である。

この文章を書き進めている最中に大分の古訓堂黒川クリニックの黒川達郎先生から連絡が入った。株式会社浅田飴のお客様相談室、太田守氏が11月28日に浅田宗伯彰徳碑を訪ねたとのこと。そして、株式会社浅田飴の二代目堀内伊太郎（堅太郎）が浅田宗伯彰徳碑建立の寄付をした時の感謝状が残っているとのこと。寄付といえば、先ほど紹介した、『漢方と漢薬』誌の記事である。早速、太田守氏に連絡を取ったところ、ありがたいことに資料のご提供をいただけることとなった（写真4）。次に感謝状の全文をあげよう。

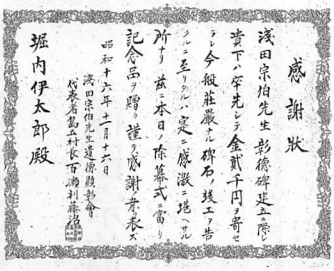

感謝狀
浅田宗伯先生彰德碑建立際し貴下ハ率先して金貳千円を寄せられ今般莊嚴なる碑石の竣工を告ぐるに至りたるは寔に感激に堪へざる所なり茲に本日の除幕式に當り記念品を贈り謹んで感謝の意を表す
昭和十六年十一月十六日
浅田宗伯遺德顯彰會　代表者島立村村長百瀬利藤治
堀内伊太郎殿

写真4

「感謝状　浅田宗伯先生彰徳碑建立に際し貴下は率先して金二千円を寄せられ、今般荘厳なる碑石の竣工を告ぐるに至りたるは寔に感激に堪えざる所なり。茲に本日の除幕式に当り記念品を贈り謹んで感謝の意を表す。

昭和十六年十一月十六日

浅田宗伯遺徳顕彰会　代表者島立村村長百瀬利藤治

（長野県東筑摩郡島立村村長之印）

堀内伊太郎殿」

太田氏によれば、この時寄付をしたのは、昭和5年から襲名した、二代目堀内伊太郎（堅太郎）五十二歳の時だということである。

今回、浅田宗伯彰徳碑を訪ねたことにより、さまざまな経験と結びつきを得ることができた。浅田飴の太田守氏との交流と浅田飴の堀内伊太郎の寄付に対する感謝状に出会うことができたのは望外の喜びである。そして何よりも浅田飴の製法を教えてくれた、浅田宗伯に対し、浅田飴の堀内家が代々恩返しをしていることが分かり、何度も感慨に浸ることができた。

本文の作成にあたり、株式会社浅田飴の太田守氏と資料提供に賛同していただいた株式会社浅田飴に感謝いたします。また大分の古訓堂黒川クリニック、黒川達郎先生には多大な協力を得ました。感謝いたします。

（医師：〒355-0221 埼玉県比企郡嵐山町菅谷249-98）